

〔目的〕 演者らは、多様化した現代の食生活の実態および今後の変化を時系列的にとらえることを目的として、特に家庭内調理状況に重点をおいた食生活調査を行っており、今回は、特に主婦の属性（大学における専攻および就業状況他）を中心に検討した。

〔方法〕 大学で食物学を専攻した主婦231名、および文学・教育学を専攻した主婦778名の家庭を対象に、1987年と1988年10月の連続した平日3日間について各家庭の食事の献立とその使用材料および調味料について記録させた。主婦の大学専攻別に一日の主食形態別喫食状況を調査した。また、調味料によって和風・洋風・中国風料理を分類し、献立における和洋混在の実態を調べた。さらに家庭内で調理された料理中の調味料使用状況を調べ、これらを主婦就業別、年代別および大学専攻別に比較検討した。

〔結果〕 ①主食形態別喫食率を見ると、朝食は食物、文学・教育学専攻主婦共にパン食が約55%と半数以上占めていた。夕食は米食が両専攻共に、約73%であった。主食別パターンにおいても、専攻による違いが見られず、朝食にパン(B)、昼食に米(R)、夕食に米(R)のBRR型が約31%出現していた。②のべ料理数に占める和風・洋風・中国風料理の割合を見ると和風料理が約70%と最も多かったが、就業別では会社員の主婦の家庭での出現率が低かった。③調味料使用状況について見ると、朝夕共に、食物学専攻の主婦の家庭の方が調味した料理数が有意に多く( $p < 0.05$ )、朝食では、一食あたりの調味料種類数も有意に多かった( $p < 0.05$ )。食物学専攻主婦は、年代による違いが見られなかったが、文学・教育学専攻主婦は年代間による差が顕著に見られた。